『草薙神剣』

作　やまかわさとみ

初演　二〇二四年　十一月月二日　名古屋能楽堂

【第一場】

［天武天皇　大蛇　火の神　水の神］

天武天皇・皇子　麗し瑞穂の　国継ぎて　若木に問わむ　月影の

地　謡　麗し瑞穂の　国継ぎて　若木に問わむ　月影の

天武天皇　そもそも是　天武天皇とは我が事なり

さても朕、壬申の乱を征し、平なる国を成しし今こそ、

国の歴史を書物に編みて、後の世に残さばやと存じ候

〽神世より　麗し国継ぐ月影の　若木に問わむ　国の道行

皇　子　因って今宵は、汝らと国史の要について語らふと思い候

慎みて申し奉り候。国史の要は数々あれど

先ずは帝の御しるしにつき、その謂れを明らかにすべしと存じ候

帝の御しるしなる三種の神器。とりわけ伝え事の多きは、草薙神剣なり

天武天皇　げにげに　其伝え事　此方へ申し候へ

皇　子　畏まって　候

天武天皇　そも草薙神剣は

地　謡　そも草薙神剣は　出雲の川すじ暴れ居る　八岐大蛇の内に有り

オロチ　我は八頭八尾　越の国よりまかりたる　オロチの末弟にて　候

兄蛇は七人の媛を食い　末なる媛を探し居る

地謡　邪気漂うオロチの眼

邪気漂うオロチの眼　クシナダヒメに寄りたれば

天より下りしスサノオが　八つの酒樋　オロチに与ふ。

大蛇　酔いしれるオロチ刻みし剣

地謡　酔いしれるオロチ刻みし剣　硬きに当たりて　欠けたるに

切り裂き尾より現るは　雨叢雲剣なり

地謡　八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣つくる　その八重垣を

火神　嗚呼　口惜しや　口惜しや

水神　口惜しや　口惜しや

火神　オロチが育てし極上の剣をスサノオごときに奪わるるとは耐へがたいことじゃなあ

水神　あの剣さえあれば、人間どもの営みなんぞ　根こそぎ浚えてくれようぞ

火神　其の上スサノオは、高天原に上って天津神にあの剣を捧げたとな

水神　天照大神が相手では、我らが致そう手立てが無い

火神　やい。すれば汝はあきらめると言うか」

水神　いいや　あきらめてなるものか

火神　しばし時を待って必ずや手に入れてくれようぞ

嗚呼　それがよかろう

【 第二場 】

［天武天皇　皇子　火神　水神　日本武尊　オトタチバナヒメ］

天武天皇　さても神剣　スサノオノミコトが大蛇の尾より取り出し　姉神様にあらせらるる
　天照大神の手に渡りたるとは　いかにも尊き事

皇　子　そののち時を七百年ほど下りて
　第十二代景行天皇の御世に　神剣　持ち給ふ皇子のおはし　候

皇　子　その名も日本武尊なり

火　神　やあやあ　なんというぞ　それは誠か

火　神　やいやい聞いたか　聞いたか

水　神　何事じゃ。何事じゃ

火　神　何事ということがあるものか。人の小童があの神剣を授けられたとな

水　神　聞いた　聞いた　東方征伐に赴いて　伊勢の祠に寄ったるところに
　天照大神の御霊預かる　倭媛より与へられたとのおことや

火　神　如何に剣の神力借りるとて
　一人ばかりなる人が　この世を治むるなんぞ能わぬものじゃ（笑）

水　神　嗚呼　片腹いたや　腹いたや（笑）

火　神　痛やの　痛やの

地　謡　尾張にて　建稲種なる副将と　あまた兵得たる尊

ヤマトタケル　神剣確かと腰に差し　川縁にて矢を作り　駿河の野辺に着きにけり

オトタチバナ　是はヤマトタケルが妃オトタチバナとは我が事なり
　ミコトの東征助けむとて倭を発ちて　今し尊に追ひつき申し　候

ヤマトタケル　嬉しきことを申すなり

さてもこの辺りの大鹿　駿河の民の恐るるとこそ聞けり
汝弓の巧なるに　ともに狩りに出らむや

火神　いや　この時節逃すまじ
賊諜りて、野火放ち、今こそ神剣奪ふなり

地謡　賊に囲まれ野火迫る
賊に囲まれ野火迫る　其時神剣　目眩むほどに　光て草を薙ぎ払ふ
その上疾風巻き起こり　炎返りて　賊滅びたり
此類稀なる神器なり　此草薙神剣と名付くなり

地謡　そののち尊　相模にて
そののち尊　相模にて　上総に往かむと海眺む

ヤマトタケル　是小さき海　走り跳ぶにも易きなり

水神　（笑）人なる小童めが　此の海を　走り跳び渡るとな
然らば　我らが　大風起こし　浪を蹴立て　即ち神剣　奪はむや

水神　人に此国渡すまじ　いざ乗り給へ　乗り給へ
小童　海に葬らむ　小童　海に葬らむ

オトタチバナ　にわかに妖しき気配有り

地謡　にわかに怪しき気配あり。是　海神の心なり
願はくは　尊の命に代はりて、自ら海にこの身を沈めんと

オトタチバナ　さねさし　さがむの小野に燃ゆる火の　火中に立ちて　問いし君はも

地謡　これを最後に　オトタチバナ　海の藻屑と成りにけり
時に神剣輝きて　浪風おさまり船行けば　尊　上総へ渡りけり

浜に立ちて眺むれば　浪に漂ふ媛の櫛　掬い上げ掬い取り
入日に翳し嘆かるる　入日に翳し嘆かるる

火神　扨も扨も　人の小童を相手に斯様に手こずるとは腑に落ちぬことじゃ。

これには何ぞ仔細のあることか。
ちと天界より真実を探って様子を見ょう。（扇で検索）
成程、彼の皇子は、只者ではない。
幼き頃より気性猛々しく、姿大きく、怪力であった。
更には　わずか十六の歳に帝の命を受け、西国へ平定に赴いたとある。
美濃と尾張から召した弓の名人を三人ばかり従えて、熊襲の国に着くやいなや、
勇猛名高き頭目の　熊襲梟師が宴を開くと聞き知って、
皇子は髪を解き、童女の姿に変えてその宴に紛れ込み、
衣に隠したる剣を、梟師の胸に一突き！　（所作）
梟師は皇子の知力と勇気に恐れ入り、
日本武尊の名を皇子に奉って　ことキレた、と、ある。
また、其帰りには、吉備の穴海と難波の柏済の荒ぶる神を平らげて
水陸両路の道を開いた　と　ある。
ううむ。彼奴が、神剣に選ばれし者とあったならば、
我らも腹を据えて思案をせねばなるまいが　何としたものであろうぞ。
のうのう。水の神　居るか。居るかやい。

水神　なんと　呼んだか。火の神。

火神　汝(なんじ)呼び出す別のことでない。今しがた例の子童の様子を探ったれば、
只者(ただもの)にはあらず。如何したかと思うてまず　汝を呼び出(いだ)いたものよ。

水神　いや。彼奴(きゃつ)が妃(きさき)のオトタチバナヒメも只者(ただもの)にあらず。
某(それがし)、相模の海で神剣を奪わんとしたれば、
舟諸共(ふねもろとも)に海に引きずり込まれたわ。

火神　(笑)まずはその様なことか。水の神が溺(おぼ)れたとあっては　河童(かっぱ)の川流れ。
まさに型なしじゃな。(笑)

水神　いや。あのヤマトタケルなる皇子は、女人(にょにん)に護(まも)られると見えた。
ことによるとあの神剣(みつるぎ)には、天照大神(あまてらすおおみかみ)が宿(やど)るやも知れぬな。

火神　成程(なるほど)、伊勢の国で天照大神(あまてらすおおみかみ)の御霊(みたま)を祀(まつ)る倭姫(やまとひめ)といい、
また弟橘媛(おとうとたちばなひめ)といい、
天にも地にも、女人(にょにん)の扱(あつか)いというは、一筋縄(ひとすじなわ)ではいかぬものじゃ。

水神　そうじゃそうじゃ。しからばこの上は、我ら天地悪神(てんちあくしん)の妖力(ようりき)を霊山(れいざん)に集めようではないか。

火神　おお、それは名案じゃ。その霊山(れいざん)に彼奴(きゃつ)を誘い出いて、迎え撃つとしようぞ。

水神　善は急げじゃ。

火神　急げ急げ

水神　合点(がてん)じゃ。合点じゃ。

火神　急げ急げ

水神　合点じゃ。合点じゃ。

火神　急げ　急げ・・・・・

【　第三場　】

［天武天皇　皇子　ミヤズヒメ］

天武天皇　如何に　誰かある

皇　子　御前に　候。

天武天皇　その後　日本武尊　如何様に成り給ひしぞ

皇　子　房総廻り　磯行けば　尾張の水軍　成合て　尊　陸奥へ入り給ふ

地　謡　王船の舳先に懸けたる大鏡　尊掲げし神剣の　神々しく光けり

是を遥かに仰ぎ見て　蝦夷恐れて戦はず

皇　子　剣の神力及びたるや　鄙の国をば平らげて　尊は帰路につき給ふ

地　謡　武蔵上野廻り来て　碓日嶺に“吾嬬はや”と　嫒偲び

皇　子　信濃に入りて山高く　白鹿と化り　立ち塞ぐ　山神をも　退けり

地　謡　人馬進まず霧深し　忽ち道を失ふも　白狗現れ導くや

皇　子　これぞ神器の証なり

地　謡　美濃の峠に早馬の　悲しき報せは　副将の

皇　子　建稲種の訃報なり

尊驚き　うつつかな　うつつかなとぞ　嘆かるる

地　謡　その後　尊　ミヤズヒメを思いやり

ミヤズヒメ待つ尾張の国へと　足を速め給ふなり

ミヤズヒメ　是は尾張の国造が女　ミヤズと申し候。

扨も我が兄　建稲種。駿河の海にて　虚しくなり給ふこと

久米八腹がしらせたり　いと口惜しう嘆く間に　尊　尾張に着き給ふ。

地　謡　契り叶ひて床の辺の　月を愛でるも束の間に
　　胆吹の山に荒ぶる神　甚だ多しと聞し召し　神剣残して発ち給ふ
　　萱津に有りて　差し仰ぐ
（破之舞）
ミヤズヒメ　萱津に有りて　差し仰ぐ
地　謡　胆吹の山に　白たへの
ミヤズヒメ　かかりし雪に言問ふも
地　謡　かかりし雪に言問ふも　打ち寄すさざ浪　応へせず
　　胆吹神に祟られし　尊の身体痛まれり
　　倭に待たれし帝への　奏上さえも叶わずに　伊勢の能褒野で身罷れり
　　陵より出て白鳥の　大空を飛び廻り来て　はるか故郷を偲び給ふ
ミヤズヒメ　〽倭は　国の真秀　畳なづく青垣　山籠れる　倭麗し
地　謡　嬢子の床辺に　尊の置きしその大刀の　なほ霊妙に光けり
　　則ち祀らむや　則ちここに祀らむや
地　謡　はるか古　神剣は　神より人に　託されり
　　東に通ずる　道拓き　湊備へ　海訪ね
　　還りて尾根の　遥かなる　眺めに誓ふ　国つくり
　　行き交ふ民とて　永久に　安らかなり　豊かなり
　　尾張国の年魚市郡　熱田宮におさまれる
　　これ草薙神剣なり　これ草薙神剣なり